

第二回「紫波の歴史かるた大会」を開催 郷土を愛でる 多様な作品で競う

紫波の歴史かるた委員会では、昨年を引き続いて、紫波町観光案内人しゃ・ベーる、槌爪館懇話会、紫波歴史研究会の構成下で、第2回目「紫波の歴史かるた大会」を2月4日(日)、紫波町中央公民館において、小・中学生のほかにかるた作成に係わった方や一般町民ら約80人が参集し、盛会裡に開催された。

かるた大会の趣旨は、紫波町は縄文時代から現代まで豊富な歴史・文化遺産がある。地域の風景・歴史伝統文化を詠んだ歴史かるたを通して、郷土の魅力や価値を発信するとともに、これから紫波町を担っていく次世代の児童・生徒に伝え、地域に対する関心や愛着を高めてもらうことである。

今回のかるた作成や大会運営においては、昨年と同様に協働研究企画・開発として、岩手県立大学総合政策部の「紫波の歴史文化遺産を活用したまちづくり」の支援活動の一環で、また、紫波総合高校の研究班は、かるたの読み句・絵札の作成等を担われた。

なお、今回は、「彦部かるた」「方言かるた」「相撲甚句かるた」の3種類加わり、昨年の「学生かるた」「一般かるた」から5種類に増え、参加者の選択が広がった。

かるた競技は、取り手4人に読み手1人が付いた1組となり、5種類が一斉に2回に分けて行われた。絵札44枚中、23枚を取った小学生の強者が最多得点者であった。

このかるた大会は、地域の活性化に加え、町民らとともに次世代を担う子どもたちが紫波の歴史を学び、そして認識を深めた一つの機会であった。(かるた一例はP4に)



【左写真】

開会セレモニー
の来賓による
テープカット

【右写真】

詠みが終わらない
うちに目当ての
絵札に手を伸べる
早業の取り手



《《 3月行事予定のお知らせ 》》

3月 3日 (日曜日)	令和5年度 紫波町 発掘調査 報告会	時間：午後1時30分～3時40分 場所：紫波町情報交流館 2階 大スタジオ 実施内容 ・発掘調査の報告(紫波町教育委員会) [遺跡：本町川原、田頭Ⅲ、才土地] ・町内郷土史関係団体活動報告 (紫波町文化財関係団体協議会)
3月20日 (水曜日)	第148回 月例発表会	時間：午後7時～9時 場所：赤石公民館 和室 発表者 宇部 真澄 「陸奥話記を読む⑥」 発表者 宮 良男 配付した資料を持参のこと 「日本の仏教 曹洞宗」曹洞宗の主な寺院(2)

令和6年2月21日開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から抜粋し、さらに文章は縮めて、掲載しておりますのでご理解とご了承願います。

宇部真澄の「陸奥話記を読む⑤」

(26) 将軍、鳥海の柵に入城。武則を労う

(康平五年九月) 同月十一日の明け方に、鳥海の柵を攻撃した。陣営からの道のりは十余里どである。官軍が柵に攻め寄せる前に、宗任、経清らは柵を棄てて逃げ、厨川の柵を保守しようとした。

将軍は鳥海の柵に入城して、しばらく兵士を休息させた。柵の中の家屋には美酒数十甕があった。兵士がこの酒を飲もうとする。将軍は制止して言った。「たぶん賊軍が毒酒を用意し、疲れ果てて入城する我が軍をたぶらかし害しようとするのであろう」と。しかし、この酒を雑役の者一、二人が飲んだが、全く害はなかった。全員ことごとく酒を飲んだ兵士らは口々に「万歳」を叫んで頼義将軍を称えた。

その後、正任の守っている和賀郡黒沢尻の柵を襲撃して攻め落とした。

さらに鶴脛の柵と比与鳥の二柵も同時に攻め落とした。

(27) 最後の拠点厨川、姫戸焼け落ちる

同月十四日に厨川の柵に進軍し、十五日の夕方に厨川、姫戸の二つの柵に到着した。

十六日の朝方から終日終夜攻め戦い、多くの弩を乱発し雨のように矢石を射込んだ。しかし、城中は堅守して攻め落とすことができず、かえって官軍のうちに死者が出た。

十七日の昼下がりに将軍は兵卒に命令を下して、「皆の者、村落に行つて家屋を壊し運び、それを城の濠に埋めよ。さらに一人一人が萱草を刈って、それを河岸に積み上げよ」と言った。将軍は馬から下りて神に祈願し、自ら火を掴んでこれを投げた。

将軍は、二度深く拝礼した。するとにわかには暴風が吹きだし、煙や火炎は空を飛ぶように燃え広がっていく。望楼や櫓、そして柵内の家屋は一時に燃え上がった。

この時、賊の陣から決死の兵数百人が鎧を着て剣を振り、官軍の包囲を突破しようとした。これに向かう官軍は、多く傷つき討たれた。武則は、兵士らに「包囲を開いて賊兵を囲みから出せ」と命じ、包囲の陣を開いた。すると賊兵はたちまち逃れようとの気を起こして、戦わないで逃げて行った。官軍はそれを横あいから攻撃し全て討った。

(28) 経清捕えられる、鈍刀で処刑される

この時に、経清を生け捕った。将軍は対面し、叱責して「汝の先祖は代々我が家の家人であった。しかるにこの数年来、朝廷の権威をないがしろにし元の主君を軽んじ無視した。これは大逆であり無道の行いである。捕らわれた今も白符を使うことができるのか」と言った。経清は顔を伏せ、一言もなかった。

将軍は深く憎んでいた。経清の苦しみを長くするため、切れ味の鈍い刀で処刑した。

(29) 貞任、捕えられ、将軍の眼前で絶命す

貞任は剣を抜いて官軍を斬り、官軍は鉞で貞任を刺した。大楯に貞任を載せて、六人でこれを担いで将軍の前に来た。身の丈は六尺余り、腰回りは七尺四寸もあった。容貌は目立って大きく、皮膚は肥えて白い。将軍がその罪を責めると、貞任は将軍の顔をひと見て絶命した。

また弟の重任を誅殺した。ただ宗任は自ら深い泥田に身を潜めて逃亡してしまった。

(30) 将軍、武則の勧めで千世童子を斬る

貞任の嫡子は13歳で千世童子といい、容貌は端麗である。鎧を着て柵外に出て奮戦した。その勇敢さは、父貞任の武者ぶりを受け継いでいる。将軍は憐れんで千世童子を許そうとした。すると武則が進み出て、「将軍よ、小さな道義を思って後に大きな害を残すことをお忘れささるな」と忠告した。将軍は聞き入れて、ついに童子を斬らせた。

(3 1) 将軍、美女を兵に与え、則任の妻、入水す

城中の美女数十人らは、煙に巻かれて泣き悲しんでいる。将軍は助け出させて、それぞれを将兵に分ち与えた。

ただ、貞宗の妻は夫に向かって「私一人では生きていけません。どうかあなたの眼前で先に死にたい」と言い、すぐさま男児を抱いて、深い流れに身を投じて死んだ。

(3 2) 安倍一族の帰降

その後、幾日も経たないうちに、貞任の伯父の安倍為元、貞任の弟家任らが心を改めて降伏してしてきた。さらに数日後には、宗任ら九人が罪に服して降ってきた。

(3 3) 十二月十七日国解、戦勝を報ず

同じ十二月十七日の「国解」に、「罪に服そうと降参した賊は、安倍宗任、弟の家任、則任、散位安倍為元、金為行、同じく則行、同じく経永、藤原兼近、同じく頼久、同じく遠久らである、これ以外に貞任の一族の者で取り逃がした者はいない。ただ正任一人だけは、まだ降伏して来ていない」と記している。

(3 4) 六年五月、正任降伏す

僧良昭は、戦場から脱出して出羽国に逃れたのを、出羽の国守の源齊頼によって生け捕りされた。

正任は初め出羽の俘囚光頼の嫡子、通称を大鳥山太郎という清原頼遠のもと潜伏していた。その後、宗任が悔いを改めて降伏したことを知って、出頭し、降ったのである。

(3 5) 武則、義家の弓勢を試み、驚嘆す

戦いが終わったある日、武則が義家に「あなたの引く弓の強さを試してみたいと存じますが、どうでしょうか」と言った。義家は「いいだろう」と言った。

こうして武則は、丈夫な鎧三領を重ねそれを樹の枝にかけて、それを的に義家にひとたび射させたところ、矢は鎧三領を射抜いていた。武則はたいそう驚いて「あなたは神の化身であられるでしょう。決して並の人間ができる射芸ではありません」と言った。

宮良男の「日本の仏教②曹洞宗(2)永平寺と道元

曹洞宗の主な寺院 (1)

山号	寺院名	御本尊	所在地	創建	開山	特記
1 釜臥山	菩提寺	延命地藏菩薩	青森県むつ市	862	円仁	天台宗修行道場→1530年曹洞宗吉祥山圓通寺宏智覚聚が再興、例大祭7月20~24日、11~4月は閉山、宇曾利山湖と八峰・4か所の温泉、日本三大霊場
						
2 大梅拈華山圓通	正法寺	如意輪観世音菩薩	岩手県奥州市	1348	無底良韶	第三の修行寺として開山、長部重義、黒石正端の外護、1350年「曹洞第三本寺賜紫出世道場」(NB・崇光天皇)、1950年曹洞宗地方専門僧堂
3	五合庵	阿弥陀如来	新潟県西蒲原	709	金智大徳	真言宗国上寺山内に良寛が13年間居住、国上寺住職の隠居寺・酒吞童子の稚児

紫波の歴史かるた大会において使用した5種類の「作品かるた」から、一例づつを任意抽出した絵札と詠み句などを紹介します。

《学生作品かるた》

詠み句：県大生・紫波総合高生
絵札：高橋美沙姫(紫波高生)



詠み句
「古代ハス 長き眠りは
800年」

《一般作品かるた》

詠み句：一般応募
絵札：紫波歴史研究会他



詠み句
「県下一杉の神木
志和稲荷」

《相撲甚句作品かるた》

詠み句：紫波町相撲甚句から編集
作詞 佐藤正雄(親族より許諾済)
絵札：紫波歴史研究会画像より



詠み句
「歴史豊富な紫波町を
史跡名所でまとめた
相撲甚句」

《郷土彦部作品かるた》

詠み句：彦部の歴史を深める会(彦部公民館事務局)
絵札：同 上
引用文献『彦部みどころよりどころ 遺跡・史跡106選』



承慶橋跡

詠み句「北上川 橋の元祖は 承慶橋」
[解説] 承慶橋は、犬吠森字間木沢の北上川から対岸の城山の麓に通じる交通路として、北上川に架設した橋であった。
この橋は、第12代盛岡藩主南部利済公の時代、弘化元年に架設された。川の中に石垣積みの中島を造り、兩岸から木橋を架けた構造であった。安政元年の洪水で流失し、その後再建されなかった。現在川の中に石垣の一部が残っている。

《紫波の方言作品かるた》

(方言一句入り)

詠み句：岩動昭氏(日詰駅前)
絵札：高橋美沙姫(紫波高生)



詠み句「メノコカンジョウ
いつでもよしとは
言いがたし」
[解説] 大ざっぱな勘定は
いつでも良いとは
限らない